



Title	工業デザインとしての椅子 : 日本の木工家具の量産化の始まりと加工技術
Author(s)	谷本, 尚子
Citation	デザイン理論. 2023, 81, p. 60-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91067
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

工業デザインとしての椅子

日本の木工家具の量産化の始まりと加工技術

谷本 尚子 京都精華大学

はじめに

木材は自然素材であるが故に、肌触りが柔らかく手に触れるものに多く使われているが、同じ樹木から採られた木材であっても個々に特徴があり、機械による量産に非常に適している材料とは言えない。それゆえ木工家具の量産化は、木材の加工技術によって極力均質化を目指す方向に行かざるを得ない。19 世紀のヨーロッパでは、トーネットが曲木の技術を開発することで、木製家具特に椅子の近代化に成功した。この技術は間も無く日本に伝わり、曲木椅子の生産は国産化されていく。

本発表では、明治から昭和初期における日本の木工家具の量産化における素材と加工技術の歴史の変遷を取り上げ、その経緯から見てくる日本の家具生産の特性を明らかにする。

トーネットの曲木椅子の特徴について

トーネットの No.14 は、古典的な職人生産と工業生産の分水嶺と言われる。すなわち、No.14 の開発は、6 つの部品をスクリューボルトやスクリュービスにより組み立てるモジュール方式を採用、パーツを均質化することで労働者の技術的水準を下げるなどの変革がもたらされ、更に組み立てモジュールの実現により、輸出を目的としたノックダウンを可能にした。

トーネットが近代化した量産家具は、工場への資本設備の導入による資本集約型産業の始まりといえる。言い換えれば「最初の消費者向け椅子『The first consumer chair』」といえるだろう¹。

この曲木の技術の導入が日本に最初に取り入れられた量産家具となる。

日本の曲木椅子の導入

日本国内での家具製造業の成立に関しては、林業との関係が深い。明治 27 (1894) 年に望月常が刊行した『木材工藝的性質論』は、ミュンヘン大学のカール・ガイエル (Johann Christian Karl Gayer, 1822-1907) の著書 Die Forstbenutzung (1868) あるいは Der Waldbau (1880) の一部を翻訳したものである。

明治政府は「材木の性質を科学的に分析し、その特性を活かして輸出産業に貢献する²」という国策を掲げ、明治 38 (1905) 年、農商務省山林局林業試験所が新設される。石村が指摘しているように、海外であまり値段が付かなかったブナ材については、加工して輸出するべきだと考えた³。石村の論考では、特に国産材の利用に関する考察において重要な指摘がみられ、森林資源活用に関する現状にまで触れている点が、日本の木工家具の課題を明らかにしているといえる。

民間企業による量産家具の始まり

農商務省は 1905 年から 1911 年にかけて曲木産業の情報を収集し、特に椅子類の輸出に照準を定め、奨励政策を積極的に進めた。秋田曲木製作所は 1910 年に開設されるが、その前年 1909 年には国策として曲木椅子は輸入禁止となる。

しかし輸入禁止以前、民間企業が国の機関に先駆けて曲木椅子の研究を行い、生産を開始している点に注目したい。例えば、曲木椅子を販売していた泉家具製作所の 2 代目の泉藤三郎は、当時流行していたピアホールの影響もあって、需要が拡大したために 1907 年頃から自社生産し始めた。こ

うした状況について木曾恕一は1916年当時の曲木産業が国産化だけでなく、すでに輸出を目指していたことを指摘している。

「将来に於て益々此の工藝の發達するに至らば、單に國內に供給するのみに止まらず、遠く外国へも輸出し得るに至るべく、此に於いて雜木の利用も完きに至り、我國産の利益を益々増進せしめ得ることとなるのである⁴。」

商業施設などで用いられた量産家具の普及と並行して百貨店での高級家具もまた、曲木の技術を取り入れた。百貨店の高級家具では他店に先駆けて三越呉服店は1910年に家具加工部を創設した。1937年には日本で最初に開発されたカンチレバー構造の椅子を販売している。この椅子は当時企業内デザイナーとして在籍していたと言われる城所右文次が東京高等工藝学校木材工藝科の助教授であった鈴木太郎の協力を得て完成させている。フレームは秋田木工に依頼して製造されたという。商工省工藝指導所の輸出洋家具

1928年に設立された商工省工藝指導所は豊富な資源があるにも関わらず、零細企業ばかりだった東北地方の木材工藝産業を振興する目的で、仙台に設置された。その目的には輸出向け工芸品の意匠及び品質改善であった。しかし1929年には世界恐慌が始まり、曲木の技術は量産向きの椅子の構造材として唯一無二ではなくなった。1932年11月、工藝指導所は開所記念展を催す。試作品を展示販売する部屋では、曲木家具だけでなく、折りたたみ式家具、籐家具、事務机、洋服箆笥、アルミアングルの家具、大阪製鋼会社のパイプ曲げ椅子などが出展されていた。

展示された輸出用家具セットの一つ（図版）は曲木のフレームを朱塗りにして、籐張された背と座の白さとのコントラストがモダンな印象を与えている。曲木のフレームは秋田木工による造作だ。

指導所の助手小栗吉隆は当時の曲木産業について次のように記述している。「…特に大量の一定形式の實用的な椅子を必要とする官廳學校、會社デ

パートの如きは、…信用ある工場の曲木椅子を使用すれば今日多く見る如き小椅子の不完全に依る醜態は見なくつてすむかも知れない⁵。」

終わりに

量産家具は農商務省山林局林業試験所の木材及び木工製品の輸出を前提として技術主導型の製品開発が行われていったが、指導的立場にあったのは望月常や鈴木太郎といった材料科学者であったことは、注目すべき点だと考える。

しかし商工省工藝指導所が成果を示し始めた1930年代には、スチール製の構造体が一般化し始め、曲木や合板の材料研究は特筆すべき結果をもたらすことがなくなる。

『工藝指導』には対米輸出に関しては、実用品ではなく、彫刻が施された骨董品のようなものが好まれている事が報告されている⁶。取り上げた輸出家具に曲木を用い、朱を塗るなどの付加価値を付けるなどの工夫が見られる。製品開発が徐々に造形よりの方向へ展開していったと考えられる。



「木工場の陳列」『工藝指導』第1巻第6号昭和7（1932）年12月号 p.16.

註

- 1 Wilk, Christopher. Thonet: 150 Years of Furniture. Woodbury, NY and London: Barron's, 1980, p.32
- 2 石村眞一著『日本の曲木家具：その誕生から発展の系譜』鹿島出版会，2012年，p.65
- 3 同然書，p.79
- 4 木曾恕一『雑木利用 最新家具製作法』下巻，博文館，大正5年，p.9
- 5 小栗吉隆「我國に於ける曲木家具工業の現状」『工藝指導』1巻第4号，p.38
- 6 「米國に於ける木製室内家具及編竹製器具に關する調査」『工藝指導』1巻第1号，p.33